

西村邦行著『国際政治学の誕生：E・H・カーと近代の隘路』

河村，しのぶ
元九州大学大学院法学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4740657>

出版情報：総合文化学論輯. 14, pp.1-21, 2021-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



西村邦行著『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』 に関する一考察

河村　しのぶ

はじめに

本稿は、E・H・カー（Edward Hallett Carr 1892-1982）をめぐる昨今の研究動向のうち、西村邦行著『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』（2012）の議論を整理・検討する。

国際政治学は、第一次世界大戦の衝撃から生まれた学問であると言われている。国際政治学の「端緒において、独特な思想史的意味を帯びた営為を指し示してはいなかったであろうか」という問題関心に基づき、西村は本書を著した(2)¹。そのため、西村 2012 は、国際政治学の祖とされてきたカーの政治思想を歴史的な視座から再検討している(2)。

既存のカー研究が、国際政治学という学問領域の「内」での研究を掘り下げてきたのに対し、西村 2012 はその「外」である、カーが著した伝記作品に着目する。伝記作品の執筆は、国際政治学に関する著作を執筆する以前に、カーが携わった学問的研究分野である。そして、各伝記作品と、カーの国際政治学における主著と一般にみなされている『危機の二〇年』（1939）の緻密なテキスト分析を行っている。

これまで、ほとんど顧みられることのなかったカーの伝記作品に着目し、それを基として、国際政治理論への展開を検討している点で、本書は極めて新規的であり、今後のカー研究において枢要の位置を占める。なぜなら、本書は、カーの伝記作品群における思索の展開を踏まえることなしに、カーの国際政治学の特性を理解することは不可能であることを提示しているためである。

本書の出版は2012年であり、2021年現在においては、出版から9年の歳月がたっている。しかし、先述のように伝記作品に着目していることはもとより、伝記作品に言及している数少ない他の先行研究とは違い、伝記作品の四作すべてにおいて、緻密なテキスト分析を行っている点と、伝記作品群と『危機の二〇年』の間に連続性を指

¹ 著者名がなく括弧内に数字のみを記している箇所は、（西村 2012）のページ数を意味する。

摘している点において、他に類を見ない。よって、西村 2012 は、今日においてもなお、非常に重要な研究であることから、その検討を以下に行うこととする。

本稿の構成は、第一に、西村 2012 の構成と全体の論旨を俯瞰する。第二に、西村 2012 がそれ以前の先行研究をどのように整理しているかを検討する。この作業は、西村 2012 とそれ以前の先行研究との違いを示し、同書の新規性を明らかにするために、重要な作業である。その後、伝記作品四作と『危機の二〇年』における西村のテキスト分析を整理していく。最後に、西村 2012 の問題点と残された課題を示し、結ぶこととする。

以上、カーの伝記作品を分析する西村著作の重要性と、出版からの歳月にかかわらない新規性、さらに、本稿の構成を述べた。以下より、西村著作の検討を始める。

1. 『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』の構成と論旨

西村の著作である『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』は、2009 年 5 月に彼が、米国フロリダ大学に提出した博士論文 “Politics at Its Demise: E. H. Carr, 1931-1939” を彼自身が翻訳の上、加筆・修正し、出版したものである (233)。

同書は、序章、結論、と五章の議論によって構成されている。

第一章は、「カーの思想とその文脈」と題されている。同章は「カーと国際政治学」そして「文脈の問題」という二節から成り、既存のカー研究の成果と限界を整理している。さらに、カーの国際政治学における位置を知るためにこそ、逆説的に国際政治学の枠外へ出る必要性を西村は説いている。その上で、西村は、彼が伝記著作に注目する理由を強調している。

第二章は、「思索の開始—初期の文芸・社会評論」と題されている。この章は、「知識人における文学と政治」という節と「仮象の剥奪」という節から成っている。第一次世界大戦により、イギリス社会に蔓延していた喪失感と、その反動として人々が希求した新しい「確かなものへの欲求」について、西村は記している。そして、政治的思惟が人文的教養との間に密接な関係を有していたことを論証し、カーの文化的な文筆活動である伝記作品の執筆もカーの政治的関心から完全に隔絶されたものでないことを主張している。

第三章から、伝記作品のテキストが分析されている。第三章は「問いの発見—『ドストエフスキー』」と題されている。同章は「心理学者ドストエフスキー」と「預言者ドストエフスキー」の二節に分かれている。西村の解釈によると、ドストエフスキーの研究を通じて、カーは、非合理的な個人はいかにして、共同体の維持や発展に関わっていくことができるのか、という問いを抱き始めた。西村は、次のように述べている。「ド

ストエフスキーの最大の貢献は、問題の所在を明らかにしたことにあつた。その限りに
おいて、彼は、カーにとっての預言者であつた」(75)。

第四章は、『ロマン的亡命者たち』(1933)、『バクーニン』(1937)、『マルクス』(1934)
というカーが書いた『ドストエフスキー』(1931)以外のすべての伝記作品について論
じている²。章の題名は「起源への遡行—ロマン主義者とマルクス」となっている。『ロ
マン的亡命者たち』について述べている「ゲルツェンとロマン主義の悲劇」、『バクーニ
ン』を分析した「バクーニンと悲劇の再現」、『マルクス』を評する「マルクスの反ロマ
ン主義」の三節から第四章は構成されている。しかし、旧来の合理主義からの離脱を図
った、どの登場人物からも、カーは彼が抱いた非合理的な人間と共同体の維持や発展の
関係性についての問題に答えを得られなかったと西村は結論付けている。

第五章は、「時代との対峙—『危機の二〇年』」と題されている。この章は、以下の
五節より構成されている。それらは「道德科学としての理想主義」、「批判哲学として
の現実主義」、「危機の構造」、「新たな理想の創出」、「過去への後退」という五節であ
る。

人間の非合理性と共同体の維持・発展の関係性という問いに一つの解を示したの
が、『危機の二〇年』であつたと西村は論じる。(3)。

『ドストエフスキー』、『ロマン的亡命者たち』、『マルクス』、『バクーニン』という
四つの伝記作品から『危機の二〇年』までの「五つの作品を軸に展開されている 1930
年代のカーの知的営為」(3)は、「人間の非合理性とそこから生まれる虚無的な政治風
土という大戦間期のヨーロッパに現れたひとつの思想的な問いに対する一貫した取り
組み」であり、その思想的な問いの解を求める点で、それら五つの作品には、連続性
があつたと西村は論じる(2)。

しかし、西村の結論は、カーの思想は後退したとしている。「人類の進歩への信頼」
(172)を無批判に前提としたカーは結局、「相対主義へと後退してしまった」のであ
ると西村は主張する(172)。

カーの解は、「進歩主義と理性崇拜に回帰」して、「その相対主義的な性格のゆえに
決定的な当為」を打ち出すことに失敗した(178)。しかしながら、「その失敗をもって
思想的な問題を明らかにすること」にカーは、貢献した(178)。これが、西村 2012
の命題である。

² 西村は時系列に反して『マルクス』より『バクーニン』を先に分析している。それは以下の
理由による。バクーニンに対するカーの関心は『ドストエフスキー』執筆時にはすでに現れて
いた。しかし、『ドストエフスキー』と『ロマン的亡命者たち』が商業上成功していなかった
ため、カーの意思に反し、当時の需要が高かったマルクス伝の執筆を先に引き受けたという事
情があつた。よって、カーの思想展開の順に基づき、西村は『バクーニン』を先に分析してい
る。

以上、西村 2012 の構成と全体的な議論について述べた。この著作の全体的な議論と命題は、西村 2012 の以前に蓄積された先行研究を、彼が批判的に検討したことから生まれている。よって、次節では、同書がどのように先行研究を整理し、検討しているかを概観する。

2. 西村による先行研究の整理

前節でみた西村の命題を踏まえて、本節では、西村がこれまでのカー研究における先行研究をどのように整理しているかを検討する。それにより、西村 2012 が何故、既存の国際政治学の学問領域の枠を超えてカーの伝記作品を分析することにしたのかが明らかになる。

まずは、カーがこの学問分野においてどのような歴史的認識をされてきたかについて、西村の整理をみていこう。西村も指摘しているように、カーは学説史における「第一の論争」の「現実主義」と「理想主義」という対立構造の中で、その勝者である「現実主義」の提唱者であるとされてきた (8)。

カーを現実主義者として認識するタイプの先行研究について、西村著作は以下の研究を取り上げている。Johnston 1967、Bull 1969、Morgan 1974、Thompson 1980、Fox 1985、Smith 1990、Mearsheimer 2005 である。

このタイプの先行研究の中心的論旨を西村は、以下のように概括する。

1970 年代までは、カーを現実主義者としながらも、カーの道徳的主張をめぐっての議論があった (8)。しかし、1980 年代になると国際政治学に対するカーの主たる理論的貢献は政治的現実主義の基礎を築くことにあったと明示的に論じられるようになり、カーの道徳主張についての議論は目立たなくなる (8)。その後も、道徳的主張についての議論は影を潜め、カーを理想主義者と対抗した現実主義者と捉える傾向が強くなった (8)。このように、若干の差異はありながらも、カーは多くの論者間で現実主義者としてとらえられてきた (8)。

しかし、その例外とみられる解釈もあったことを西村は指摘する (9)。

その例として挙げられるものが、次に見るような、カーの理想主義的側面に着目する研究群である (9)。それらの研究群として、西村は以下の研究を取り上げている。代表的なものとして、Evans 1975、Booth 1991、Jones 1998 が挙げられている (9)。

このタイプの先行研究は、現実主義が理想主義を擁護するためのレトリックであったと主張した (9)。これらの研究により、カーは、根本的に道徳主義的な思考を備えていたと捉えられる傾向が強まったと西村 2012 は主張している (9)。

次にカーの学説史における位置をめぐる先行研究について、西村の整理を見てみよう。この領域における先行研究としては、以下のものが取り上げられている。すなわ

ち、Schmidt 1998、Ashworth1999、Wilson 2001、Ashworth 2002、Schmidt 2002、ロング/ウィルソン 2002、Ashworth 2006、Torbjørn 2008 である (6-7)。

このタイプの先行研究においては、以下の三つの主張が為されている。第一に、現実主義ではなく、理想主義こそが現代国際政治学の源泉である (12)。第二に、現実主義と理想主義とは、戦間期において明確な対立軸ではなかったが、カーにより、最初に二項対立が持ち込まれた (15)。第三に、カーの思想が、根底において理想主義の思想に近いことを指摘している (14)。

ここまで、西村による既存の欧米における先行研究の整理を概観した。以下には、それらの先行研究の整理を経て、西村がそれらに対して、どのような批判的考察を行っているかを検討する。

まず、理想主義こそが現代国際政治学の源泉とするアシュワースに対して、西村は疑問を呈している (12)。なぜなら、アシュワースがカーを読み解く最適の文脈として現実主義と理想主義の二項対立論争を前提としているからである (12)。さまざまな研究により、今日では、カーの理想主義的側面が表れてきた。西村の主張に従えば、現実主義と理想主義という、このような二項対立を前提とする単純な視点は、カーの国際政治学の祖という位置を剥奪するには、あまりにも説得力に欠ける (12)。

さらに、カーの理想主義的側面は多々、論じられてきことを鑑みれば、そもそもカーの主張の核は理想主義への攻撃であったのかと西村は疑問を投げかける (14)。

かくて、西村 2012 は、理想主義者たちは攻撃しなくともよい相手を攻撃していた可能性があるとは主張する (15)。つまり「第一の論争が神話であったとして、それは、理想主義者らが自ら作った神話だったかもしれない」のである (15)。

最後に、西村による日本におけるカーの先行研究整理を見てみよう。西村は、以下の先行研究を取り上げている。

それらは、三輪 1988、吉川 1997、岡安 2000、遠藤 2003、山中 2007、三牧 2008、角田 2008、角田 2009 である (11)。

西村はこれらの先行研究の意義と価値を称賛しながらも、次のような批判的考察を行っている。

カーの国際政治思想を全体的に理解するためには、狭い意味での政治に関する議論だけを追うのでは不十分である (18)。吉川、山中、三牧、角田らの研究は、いずれも具体的な政治問題に関するカーの議論を検討し、それ自体として有意義な分析を提示している (18)。しかし、その議論は、「国際政治の誕生に関して投げかけている思想史的な意味を問うものではない」 (18)。

三輪・岡安、遠藤の研究は 19 世紀的なイギリスの自由主義と大陸哲学の流れという、より広範な思想的伝統を背景にした研究を展開している (18)。しかしながら、彼らの研究も、そうした諸伝統を扱う際、関心対象を狭い意味での政治思想に限定して

いると西村は指摘している（18）。したがって、それらの研究も、カーが思想史の中で占める位置を明らかにしていないと西村は主張する（18）。

以上の先行研究の整理を踏まえて、西村は国際政治学の文脈内にカーを位置づける既存のカー研究に対し、カーの関心は狭い意味の国家間政治のみにあるわけではないことを主張する。そして、カーの思想を再検討するためには、国際政治学の外に出て、カーが国際政治学に関する研究以前に執筆した伝記作品を分析することが必要であることを論じる。

以上が、西村の先行研究に対する整理と批判的考察である。このような先行研究の整理と批判的考察により、西村はカーの思想を再検討する必要を唱え、国際政治学の誕生に注目することと、既存のカー研究が関心を向けることが少なかった伝記作品へ着目する理由を明らかにしている。

本節で概観した先行研究の整理の妥当性と問題関心を踏まえて、次節以降では、西村の独自の説の論証を検討する。そのために、西村 2012 における伝記四作品と『危機の二〇年』の解釈を入念に追っていく。次節では、カーの処女作である『ドストエフスキー』の西村解釈を分析する。

3. 西村の『ドストエフスキー』解釈

すべてのテキストの具体的分析を始める前に、西村は分析方法を明らかにしている。彼はまず、議論の目的はカーを理解することであって、伝記作品の登場人物について知ることではないことをまず明言する。また、彼は分析において「各作品の叙述を支えている筋立て」すなわち「プロット」に着目する重要性を示している（43-44）。その理由として、西村はプロットの決定を「伝記著者が自身の対象とする人物の生を意味づける際、その核心にある行為だからである」としている（44）。

以下、西村による『ドストエフスキー』の解釈を詳しくみていこう。

冤罪によるシベリア流刑の経験により、ドストエフスキーの価値観は大きく揺るがされたという図式をカーが採用していることに西村は注目する。

ドストエフスキーの初期の小説は、彼の代表作となる後期の作品と大きく隔たっているとカーは解釈している。それは、ドストエフスキーのシベリア流刑に起因するとカーは論じる（46）。そして、流刑後のドストエフスキーの中には、価値観の揺らぎから、ある問いが現れたというカーの主張を西村は強調している。価値の揺らぎから生まれた以下の問いは、西村 2012 の中でも、主要なテーマとなっている。それは「人間が根本的に理性的ではないとするならば、我々が擁護しうる規範とはいかなるものであろうか。そうした非合理的な人間たちは、どのようにして、共生関係を築くことができるのであろうかという問い」である。（47）。

西村は、カーがドストエフスキーを「ロシア人の中のロシア人」であったと呼んでいることに注目する (54)。そして、このロシア的作家が「人間の非合理性を見つめる中、イギリス発祥の功利主義から離れて思想を築き上げていた」ことを強調する (54)。

カーが『ドストエフスキー』において、次のように論じていることから、この点における西村の主張は妥当である。

この頃までに、ドストエフスキーの確信において最も強いものの一つとなっていたのは、チェルヌイシェフスキーのような楽観的功利主義者たちが信じていたように、人間の本性が、根本的かつ本質的に善であるなどということではなく、人間とは、その本質の一面の基つき、悪を悪と知りながら欲し、また、選ぶ可能性があるということだった (Carr 1931, p.120)。

また、西村は、カーによる思想家ドストエフスキーとは「知的・物質的の両方の生において、自身以外の者に振り回されることを自ら求め、その辛苦の中に光明を見るとき、非合理主義的な理想を探求していた」人物であると論じる (56)。

そして、カーの考える後期ドストエフスキーの主題は「行動の中の哲学」であることを西村は挙げている。『罪と罰』、『白痴』、『悪霊』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』といういわゆる五大作品を通して、ドストエフスキーが至った彼の最終的な到達点は、「宗教的で、情熱的で、自虐的な」信仰の獲得であった (61)。即ち、カーにとって、ドストエフスキーは、「人間精神の混沌を受難への理性的な信仰でもって解決した、合理性と非合理性の統合者として理解された」と西村は論じる (61)。

西村はこの点に「カーの後の思想的発展との関連から見て興味深いいくつかの論点が存在している」という (61)。とりわけ、ドストエフスキーが使用した二項対立と広い意味での弁証法的な思考方法は、後にカーが多用する思考の型であることを、西村は指摘している (61)。そして、ドストエフスキーの精神の形成過程を前後に分けていること、ゴーゴリとドストエフスキー、さらにツルゲーネフとドストエフスキーといった思想的な対比をカーが行っていることを西村は例に挙げる。

その思考の型は、カーの次のような表現に見られることは事実であり、この指摘は正しい。

ツルゲーネフは、彼自身について、また、世界における彼の位置について、確かな感覚を持っており、その他の面では、不可知論者であった。神も母国も彼の基準に沿わなければ、投げ捨ててしまう覚悟が完全にできていた。ドストエフスキーはというと、何事も確信しておらず、特に彼自身についてあやふやなまま、ロシアと

ロシアの神に対する信仰へ情熱的にしがみついており、それだけが、世界における確かな足場を彼に与えてくれるようであった (Carr 1931, pp.169-172)。

西村によると、「ロシア的な非合理性認識は、少なくとも潜在的には、ヨーロッパを再構築する助けとなるもの」とカーは捉えていた (66)。カーは第一次世界大戦によって、活力を失い母国が衰退していく様を憂いていた。西村は次のように述べている。「カーは、ドストエフスキーのロシアが体現していた活力の全てを失った世界に生きていた。だからこそ、ドストエフスキーに魅了された」(74)。

西村は、カーがジョン・ハレットというペンネームで投稿した「漂流するイギリス」という論稿を引用し、カーが以下のように一種の信念を持とうとして、その一步を探っていたことを論じている。カーは次のようにその論稿で述べている。

我々は、今一度、自分たちを信じ、守る価値のある信条を、労力を費やすための大義を、果たすだけの使命を見つけ出し始めるであろう (Hallett 1930, p.362)。

ただし、カーは、ドストエフスキーの宗教的な解決方法には、満足しなかったと西村は結論付ける (73)。西村によると宗教的な信仰による問題解決は、20 世紀前半を生きたカーには納得できなかった (75)。

カーは、非合理的な個々の人間が、いかにして共同体の維持や発展に関わっていくことができるのかという問いを、ドストエフスキー研究によって発見した。西村は、ドストエフスキーのカーに対する最大の貢献を「問題の所在を明らかにしたことにあった」と主張する (75)。

以上、西村の『ドストエフスキー』の解釈について検討した。非合理的な人間がいかにして共同体を維持・発展することができるのかという問いに対する満足できる解を得られなかったカーは、問題をさらに追及するために、近代西欧文明への批判を投げかけた他の人物たちの研究を行った。そのために、『ドストエフスキー』に続く伝記作品をカーは著したと西村は論じる。本稿では次節より『ドストエフスキー』の次にカーが著した『ロマン的亡命者たち』の西村による解釈を考察する。

4. 西村による『ロマン的亡命者たち』の解釈

『ロマン的亡命者たち』のなかで、カーが行っていたこととは、「個々人の非合理性を一つの焦点として、個と社会との関係（つまりは個の他者に対する関係）を問うことであった」と西村は論じている (83)。ロマン主義者たちが「皆、個人的な感情と普遍

的な愛との間に引き裂かれていたとして、この愛の問題こそ、ドストエフスキーとロマン主義者らとの類縁性を示唆するものである」と西村は述べる（83-84）。

『ロマン的亡命者たち』の主人公であるアレキサンドル・ゲルツェンとその妻ナタリア、そしてゲルツェンの友人のゲルオク・ヘルヴェークの三者は、サンド的なロマン主義者の愛の思想に惹かれ、それを実践した。西村によると、その三者の関係が悲劇的な失敗に終わるさまを鋭く描くことによって、カーは「ロマン主義思想自体の崩壊」を表現している（79）。「個人としてのゲルツェンと革命家としてのゲルツェンがその失敗において相重なる関係にあったとするならば、ここには、愛をめぐるロマン主義的な葛藤も深く与っていた」と西村は論じている（83）。

西村は「非理性的人間の不調和を悲劇として描いた『ロマン的亡命者たち』もまた、『ドストエフスキー』と同様、十九世紀的な虚飾を取り去る一つの実践」であったと分析している（84）。

そして、ドストエフスキーと出会い、非合理性の問題についての考察を始めたカーにとって、愛の問題は人間の非合理性と密接にかかわっていることを西村は指摘している。また、ロマン主義の思想的な未熟さについて理性的批判を加える一方で、ロマン主義に感情的には魅了されていたカーの両義性を西村は明らかにしている。

しかしながら、ロマン主義者ゲルツェンらもまた、ドストエフスキーの信仰の倫理と同様、人間の非合理性の問題解決に至る満足な理論をカーに提供してくれるものではなかった（84）。何故なら『『ロマン的亡命者たち』のテキストからは、非合理的な人間たちがいかなる社会を築き上げることができるのかに関し、実践に移しうる展望を引き出すことはできない』からである（84）。

西村は、ロマン主義と、のちに検討されるマルクス主義とを対比し「『危機の二〇年』における理想主義と現実主義との対比を思わせるところがある」と論じる（87）。そして、西村 2012 は、「ドストエフスキーから遡られた過去にも、やはり大戦間期に通じていく何かが認められている」と論じ、以上二冊のカーの伝記作品の間に連続性を指摘している（87）。

以上、西村の『ロマン的亡命者たち』に対する解釈を見た。このように、西村の『ロマン的亡命者たち』の解釈は『ドストエフスキー』との類縁性を指摘し、非合理的な人間にまつわる問題に再びカーが着目したことを論じる。そして、カーはこの作品の研究からも、満足した解を得られず、次なる作品の執筆のための研究を行ったことを西村は述べている。したがって、西村 2012 は、『ロマン的亡命者たち』に続くカーの著作である『バクーニン』を分析していく。よって、本稿は次節において、西村による『バクーニン』の解釈を検討する。

5. 西村による『バクーニン』の解釈

『ロマン的亡命者たち』におけるゲルツェンについての描写がそうであったように、カーは『バクーニン』において、バクーニンの「私的生活と知的生活との交錯を描きだしつつ、ある種の運命論的な構成を採っている」ことを西村は指摘している。つまり『バクーニン』が『ロマン的亡命者』と「同様な文芸上の戦略を用いている」と述べている(88)。ゲルツェンの場合と比べて、バクーニンの場合には、物語の中心に来るのが「愛への情熱ではなく反逆への献身」だったと西村は論じる(88)。そして、それを立証するために、カーの原文を引用している。

ミハエル・バクーニンは、偉大なる愛の人としてではなく、大いなる反逆者として歴史にその座を勝ち得たのであるから、最初の愛よりも最初の反逆の方を、彼の足跡のより重要な山場として見て差し支えない(Carr 1937, p.12)。

西村によると、カーはバクーニンを「象徴的にロマン主義的な人物」と捉えている(90)。そして、西村は、カーのロシアにおけるロマン主義の解釈を以下のように整理している。

「ドイツ観念論に大きく影響をうけて広まったものであり、現実から逃れていくことを是とする傾向がみられる」(90)。しかしながら「それでも、現実と理想との緊張関係に心を惑わせるのが、三〇年代のロマン主義者らの常であった」とカーが記していることも西村は指摘している(90)。

そして、ここには理想と現実との緊張を複層的に認めることができるとして、「この分裂を—必ずしも万全にはなかったにせよ—ひとまず止揚したのは、『バクーニン』においてもやはり、ドストエフスキーであった」と西村は述べる。

『バクーニン』第五部「バクーニンとマルクス」には、「五〇〇頁ほどある書籍全体の四分の一近くもの紙幅が費やされており、同論争がバクーニンの人生に有した重要性は具体的なページ数でもって効果的に示されている」という点を西村は強調する(95)。しかしながら、彼はまた「マルクス対バクーニン」と題された一章に割かれている頁数は、二〇頁にも及ばない点も指摘する(95)。なぜなら、このことは、「バクーニンがもとから負ける定めだったのであれば、対決へ至る流れは重要であれ、実際の対決の詳細など問題ではなかったと解釈しうるのである」と西村は論じている(95)。

「ゲルツェンの物語が「適切に」悲劇として終わらなければならなかったように、バクーニンの物語もまた、悲哀を込めて語られている」と西村は解釈している(96)。

マルクスとバクーニンの間の相互理解が可能にならなかった主要因は、カーの考えでは「究極的に言って、彼らの出自にさかのぼるもの」だからである(96)。

西村は、カーの以下の記述を引用している。

ロシア貴族とユダヤ人法律家の息子との間には、気性の衝突が存在していた上に、伝統や発想の面で、いかなる背景も共有されていなかった。だから、初めから、彼らは互いに理解しあうことも好意を寄せあうこともなかったのである(Carr 1937, p.129)。

以上、『バクーニン』についての西村の解釈を検討した。カーがロマン主義について論じるとき、そこには常に、その思想的な未熟さに対する理性的な判定と、それにも拘わらず魅力的であるという感情的な評価とが交錯していることを西村は注意深く指摘している(102)。カーがバクーニンを評価したのも、個人主義的な思想信条に対する一種の憧憬ゆえであったと西村は述べている(102)。ゲルツェンやバクーニンのようなロマン主義者に対して、カーはロマン主義者の超克者としてマルクスを描いている。次節では、ロマン主義者たちと対照的に描かれている『マルクス』について、西村 2012 がどのような解釈を行っているかを分析し、一連の伝記作品についての西村 2012 の解釈を総括する。

6. 西村による『マルクス』の解釈

カーにとって、マルクスは「印象深いロマン主義者たちと対比される冷たい理性の人」であったと西村は論じている(103)。しかしながら、「革命を切望するうえでは、マルクスもまた、情熱的」であり、それは「一方では信仰や狂信に近く、しかし、他方では常に理想的な推論を伴ったものであった」と西村は述べている(104)。

西村によると、カーはマルクスの独自性を、ヘーゲルの観念論とフォイエルバッハの唯物論とを融合したうえで、さらに英仏の哲学からもいくらかの知見を取り入れた点に見出している(106)。そして、フランスの社会主義者たちは、カーによると「解放を待っている抑圧された労働階級という考え方」をマルクスに教えた「生きた戦う有機体」であったと西村は述べる(106)。しかし、カーが「マルクスはフランス社会主義者たちのロマン主義的な感傷性を受け入れることはなかった」と述べていることを、西村は見逃さない(106)。

西村の考えでは「カーのマルクス評価に関しては、少なくとも二つ言及しておくべき論点」があるという(108)。第一に、西村 2012 は、マルクスとフランス社会主義者たちとの類似性を指摘することによって、「カーがこれまで論じてきたロシアの革命家とマルクスの間に近さを嗅ぎ取っている」(108)。同書はまた、ロシア人たちがヘーゲル主義を「革命の代数学」と呼び、マルクスもまた「ヘーゲル弁証法の階級闘争論理への転換を論じた」点も指摘している(108)。カーのテキストにおいては、次のような箇所があることから、この指摘は妥当である。

マルクスは、ロマン主義者たちから、憎悪の創造的な属性に関する信念と、ブルジョワや「俗物」に対する痛烈な侮蔑とを受け容れた。そして、これらのロマン主義的な要素は、ヘーゲルの措定・反措定概念とおかしな形で混合され、人々の知る階級憎悪説を創出したのである（Carr 1934, p.75）。

第二の注目すべき点として西村 2012 が挙げるのは、マルクスにおける「哲学からの逸脱」が、彼の「科学的精神」に矛盾するものと、カーが捉えている点である（109）。カーは「マルクスを哲学者及び数学者と比較し、弁証法過程の有限性に関する彼の信念」を有していたとして、マルクスの思想を「科学的精神に逆行するもの」とし「ヴィクトリアンなもの」と呼んでいることに、西村は注意を喚起している（109）。カーのテキストにおいて、下記の記述があることから、西村の指摘が裏付けられる。

マルクスの信念は、単に近代思想においてのみならず、マルクスの思想に特徴的である懐疑的かつ科学的精神にも逆行するものであるため、驚くべきものである（Carr 1934, p.80）。

『ドストエフスキー』から『バクーニン』までの三作品と『マルクス』の関係性を西村は次のように解釈している。「バクーニンから、マルクスへの移行はロマン主義から科学主義への単純な転換というにはやや複雑である。マルクスの思想にはむしろ両者が混在しており、理性と非理性との間にある種の統合を打ち立てようとする傾向も見て取れる。しかし、その試みは不十分であり、マルクスの思想は折衷的なものに止まっていた」（113）。

こうして、非合理性をめぐる 19 世紀の思想家達についての探求はいずれも、カーに答えを与えるものではなかったというのが、西村の伝記四作品分析の結果である。

以上、西村の『マルクス』の解釈を考察した。『ドストエフスキー』はカーに「問題の所在」を明らかにした。しかし、ドストエフスキーの宗教的な信仰という策はカーにとって納得のいく問題の解決方法ではなかったと西村は考える。『ドストエフスキー』に続く伝記作品の登場人物たちからも、非合理的な人間がいかにして共同体の維持や発展に関わることができるのかという問題に、解を得ることはできなかったと西村は、伝記作品執筆過程におけるカーの思索を総括する。次節では、以上の伝記作品群の分析を基に、カーの国際政治学の著作である『危機の二〇年』を西村が如何に解釈しているかを検討する。

7. 西村による『危機の二〇年』の解釈

前節までにみてきたように、カーの四つの伝記はいずれも「維持しうる理論をカーに与えてくれなかった」と西村は論じる（117）。そこで現れたのが『危機の二〇年』であったと西村は主張する（117）。

『危機の二〇年』では、「マルクスへの言及はいくらも見られるものの、ロシアもロシアの思想家もほとんど触れられてはいない」点を西村は認識している（117）。しかし、「カーにとってのロシアが同時代の脅威に光を照らす半ば道具的な枠組みであったことを考えると、この事実に拘泥する必要はない」と西村は論じ、伝記群と『危機の二〇年』の間の連続性を強調する（117）。つまり、伝記群は「問題」そのものの出会いであり、伝記群からカーが学んだことは「処方箋」ではなかったのであると西村は主張するのだ（117）。「理想主義と現実主義の思想的な淵源を辿るならば、『危機の二〇年』が一つの歴史研究であり、伝記群と出発点を共有していることが明らか」であると西村は言う（117－118）。次項ではまず、西村が多用している、歴史の流れの中の現実主義と理想主義について考察する。

（1）歴史の流れと現実主義・理想主義

『危機の二〇年』第一章の国際政治学をめぐる、よく知られた記述において「理想主義と現実主義の関係は歴史の流れの中で捉えられている」点に西村は着目する（118）。

「理想主義と現実主義とは、それぞれ、一般的な型のものと、（18世紀半ばないしは19世紀以降の）特殊な型のものとに分けて論じられている」と西村は述べる

（119）。カーは「近代以降のヨーロッパを焦点に議論を進めようとしている」と西村は考える（119）。なぜなら、近代以降の思潮には、それ以前の思潮に質的に区別されるべき「進歩主義」という特徴が加わっているからであると彼は述べる（119）。したがって、「カーが理想主義を批判したというのであれば、その対象を成していたものも、こうした近代型の理想主義だったはずである」と西村は論ずる（119）。したがって、その近代理想主義の起源についての西村の解釈を次項では検討する。

（2）近代理想主義の起源

近代理想主義の出発点に位置するのはアダム・スミスであると西村は述べる（120）。スミスの「自由放任思想は、個人と社会との緊張を解決する道徳的な基礎」であるとカーが捉えていることを、西村は指摘する（120）。

スミスの道徳思想を別の言葉に置き換えたものが、ベンサム功利主義だったと彼は説明する(120)。要するに、「近代理想主義とは、啓蒙期の合理主義の延長上において、良き社会の根拠を理性に求める立場であった」と西村は述べる(120)。

しかし、そこでは、「小さな工場を要した小さな社会という前提」が維持されねばならなかった(120)。それに対して、「より普遍的な思想へと祀り上げられた近代理想主義は、無批判に適用範囲が拡大されていく中で混乱を生み出していく」点を西村は指摘する(120)。

具体的に言う。「国際場裏にまで進出していった自由放任思想は、帝国主義的な拡張路線を理論的に正当化する道具に堕したということである」と西村は述べている(121)。そのような、近代理想主義の限界とは何かという西村の考察を次項は概観する。

(3) 近代理想主義の限界

19世紀後半の帝国主義的な競合から第一次世界大戦に至る過程において、「近代理想主義は限界を明らかにしていった」というカーの考えに西村は注目する(121)。そして戦後に近代理想主義の復活が見られたのは「19世紀に西欧諸国が有していた前提を未だ保っていたアメリカが、ちょうど19世紀西欧諸国の過ちを繰り返すところに起こったものだった」というカーの解釈を記している(121-122)。

西村によると、ヴェルサイユ体制を通じて、「アメリカが推し進めようとしていたのは、自由民主主義を普遍化し、特定の時と場所を超えて広めること」であった(122)。この点に関して、カーも「旧来の自由主義が文脈を超えてこのように『再導入』されたことにこそ問題があった」と述べている(122)。

以上、近代理想主義についての議論を見たが、それでは、理想主義と対を成す現実主義とは、何を意味するものだったのであろうか。以下に検討していく。

(4) 現実主義及び近代現実主義の定義

西村は、現実主義を「従来の理解によれば、いわゆるリアルポリティークの発想こそが現実主義の中核」と述べている(123)。さらに、「複数の研究者によれば、それは19世紀ドイツの思想ということになる」と彼は主張する³(123)。

³ その根拠の一例として、西村は次の文献を挙げている。篠田英朗「国際関係論における国家主権概念の再検討—両大戦間期の法の支配の思潮と政治的現実主義の登場」『思想』九四五(2003年1月)86-103頁。

『危機の二〇年』では、ヘーゲル、マルクス、シュペングラーに加え、ルカーチやクローチェなど非ドイツ人哲学者の名前も持ち出されていることから、「ヘーゲル以降というやや曖昧なくくりの下であれば、一つの伝統を成しているように思われる」と西村は現実主義を解釈している（124）。そして、カーの同時代に目を向けた場合「そうした伝統の行きつく先には議論の対象として取り上げられうる思潮として歴史主義がある」と西村は主張する（124）。

西村によると、この歴史主義の特徴である「動的な精神を軸に、近代形而上学の弁証法的な乗り越えを図っていく」世界観こそ「マンハイムの知識社会学の基礎」である（125）。さらに「世界が事物の相関の中に形作られるものと理解され、知が個別の歴史的な文脈に拘束されるものと捉えられている」として、そうした知識社会的な立場こそ『歴史主義』で論じられているとした精神態度に他ならなかった」と西村は主張する（125）。

「カーの言う近代現実主義は、そこに歴史主義をも含めた場合、ある程度一貫した思想的伝統として理解されうるものとなる」として「歴史主義が自然法に基づく世界像を止揚するものであるというならば、近代理想主義への批判を成す近代現実主義がやはり啓蒙思想から進歩の観念を取り入れていたという叙述にも、この解釈は整合的である」と西村は彼の解釈の正当性を主張する（125）。

西村によると『危機の二〇年』のテクストを追っていくならば、「歴史主義と政治的現実主義との交差は実のところその全編に組み込まれている」ことが理解されるという（127）。まず、「近代理想主義はちょうど歴史主義の批判の対象となるような合理主義の伝統」であった（127）。それに対置されたのが近代現実主義であったとすれば、「それは歴史主義が対抗していたのと同じ理性崇拜的な思想に異議を申し立てるものである」（127）。

西村によると、カーは次のように考える。「近代理想主義は『相対主義』で『プラグマティック』な思潮である」（127－128）。19世紀後半に、「近代理想主義が失墜し始めていたことを指摘するカーは、実に、その当時この思潮を批判した人たちを心理学者たちとすら呼んでいるのである」として、カーの原文を引用し、西村は自説の正当性を主張する（128）。

正しい行動を推し進めるには理性さえあれば十分であるとの信念は、心理学者たちの挑戦を受けた（Carr 1939, p.36）。

現実主義は、既存の状況が含む諸矛盾の中から現れてくることから、「近代現実主義の登場を許す近代理想主義は、その合理的原則の裏に批判されるべき非合理的な側面を隠し持っている」ということになる（129）。

以上の考察を踏まえて、カーの言う「近代現実主義とは、合理的経済人モデルへの内在的批判から生まれてきた思潮と理解することができる」と西村は解釈する。それゆえに、「近代現実主義の登場とは、ヨーロッパにおける具体的な政治体制からそれと連関する人々の生感覚までの変化を総合的に言い表す現象」であるとの解釈を西村は提示する（130）。

しかるに、近代理想主義と近代現実主義とは、「文明史上の異なる二つの段階を画している」と西村は主張する（132）。近代理想主義から近代現実主義への移行とは「文明全体を包み込んだ一種の革命」なのでであると西村は論じる（132）。

以上、現実主義と近代現実主義についての西村の論述を考察してきたが、現実主義と近代現実主義とは、果たして同義であるかという疑問が残る。よって、次項では、この点について西村の議論を分析する。

(5) カーの意味する現実主義と近代現実主義は同義であるか

西村 2012 におけるカーの現実主義と近代現実主義が同義であるか否かであるかは、注意深く考察されなければ理解されにくい。結論から述べると、両者は同義であるようである。

西村は、カーの言う近代現実主義とは、「歴史主義、政治的現実主義、実在論のそれぞれと接点を有するような立場といえる」と論じる（134－135）。そして、西村は次のように議論を展開している。

自由主義的な伝統としての近代理想主義が疑問に付されたとき、その在り方が多様であったとしても不思議ではない。ちょうど現代の我々も、同時の思想運動をモダニズムとしか総称しようがないように、カーもやはり現実主義としか名付けようがなかったのではないだろうか（135）。

カーの「現実主義が指し示していた各思潮」は、以下のようにまとめられると西村は述べる。西村によると現実主義は「対象をありのままに見ようとする態度、つまりは物事から観念の覆いを取り去ろうとする姿勢において一致していたと理解することが可能である」（136）。

近代理想主義とは、まさに「ありのままの利益関心を抽象的な理念で覆い隠すもの」だったと西村は述べる（136）。カーにとってのマルクス主義とは「虚飾を取り払うための方法論」であったと西村は解釈する。さらに彼は、以下のように論じる。カーの言う「現実主義の世界においても、国家間の利益の衝突は（物理的に）『実在の（real）』ものであり、（歴史的に）『不可避な（inevitable）』ものである」（137）。

したがって、力や利益は近代現実主義を構成する本源的な要素ではなく、「主となるのは、あくまで抽象的観念を排し現実を歴史と同視するような世界観」であると西村は論じる（137）。よって、彼によると、近代現実主義の世界とは、「超越的な客観的理性が歴史の流れを規定する機械論的な世界」なのである（137）。

ここまで、現実主義と理想主義についての西村 2012 の議論を見てきた。以下には、西村 2012 の『危機の二〇年』におけるその他の議論を検討していく。次項ではまず、西村 2012 における非合理性の問題と普遍主義との関係についての議論を考察することとする。

（6）非合理性の問題と普遍主義

20 世紀に入って、民主主義はいよいよ本格的に制度化されていくことになった。古典的現実主義出現の要因として心理学の確立と共に、民主主義の拡大が挙げられると西村は指摘している（142）。「理性的・文明的・道徳的たれという言説こそが政治の次元における非合理性を増幅せしめてきた」のであると西村は述べる（142）。

カーが世論の重要性をしばしば強調していたのは周知のこととして、それもまた、「こうした非合理性への問題意識があつてのこと」だったと西村は解釈する（142）。

西村は次のように述べている。「自由主義的な政治思想のなかから非合理性の問題が立ち現われ、さらには、否応なく国際場裏へと広がる中で人々の生に影響を与えるようになった時代、その客観性が疑われざるをえなくなった普遍主義こそ非合理性の問題をいよいよ本格化させてしまう最大の原因」なのであった。（143）。

第一次世界大戦直後、すでに時代遅れということが、うすうす理解されていた理想主義は、なお宣伝され、非合理性を覆い隠し肥大させてしまったが、その結果として、1930 年代の危機がやってきたのであるというカーの解釈を西村は描き出す。それにより、西村は「覆いを剥ぐ現実主義が必然的に湧き上がってくる」となったことを論じる（143）。

西村は続けてこう述べている。「合理性の仮面を取り払ったところに現れた人間の非合理性が、乗り越えられるべき問題そのものであったことから理解されるように、現実主義の登場こそ危機の兆候ということになる」（143）。

以上の議論に続いて、西村 2012 は虚無主義について論じることを始める。次項は、虚無主義と現実主義に焦点をあて、同書の議論を追う。

（7）現実主義と虚無主義

現実主義の政治的な含意とは、「彼が同時代に見ていた虚無主義のそれにほかならない」と西村は論じる（143）。一般的な枠組みに収められない個別なものをその特殊性のままに捉えようとする歴史主義は、それゆえに相対主義に陥る」危険性をもっており、相対主義とは、「自然法が提供してきたような倫理的判断の共通土台を排する中で虚無主義を生み出す危険性」を孕んでいることを西村は指摘する。

既存の諸力を受け容れる現実主義は「(客観的) 思想の名の下に提唱されるものの、思想を不毛にし、行動を否定するという帰結に至る点まで推し進められうることは疑いがない」のである。「論理的には抗いがたいとしても、思想を追求するために必要な行動の源泉を我々に提供してくれないのである」というカーの解釈に西村は注目する（146）。したがって、カーは「現実主義の中に見る歴史とは、超越的で非人格的な力の顕現」なのであると述べる。このように、カーが現実主義に限界を見出していることを西村は指摘する（146）。

1930 年代初頭に「イギリスに見いだされた虚無主義は、ヨーロッパ大のものに広がっていた」ことを西村は指摘する（146）。それゆえに「国際政治とは、近代の行きついた危機そのものということになる」と西村は主張する（146）。

以上、虚無主義の問題を概観した。次項では、これらの問題に対するカーの解を西村 2012 が如何に著しているかを概観する。

(8) 非合理性と虚無主義に対するカーの解

それでは、非合理性と虚無主義の問題に対する解がどこに見出せるかという点、「それは近代現実主義がいかにして終焉を迎えるのかという点」においてであろうと西村は論じる（151）。カーは既述のように、現実主義の限界を述べてきた。しかしながら、その具体的な問題の解決方法に関するカーの理解は、「現実主義だけでは不十分というごく一般化されたものに落ち着いてしまっていて」、「そこに潜んでいるより深遠な問題は、往々に見過ごされている」ことを西村は強調する（151）。その「深遠な問題とは」西村によると「個々の人間の生は歴史の法則に還元されえないと主張するカーの倫理学」である（151）。

西村は、カーの以下の原文を引用し、自立した個人の判断をカーが主張していたことを示す。

戦争と平和に対する責任は、我々一人ひとりにかかっている（Carr 1936, p. 847）。

そして、国際政治学者は戦争と平和に関して何を為すべきか、という問いに対するカーの答えは「世論の啓蒙である」と西村は論じる（153）。カーの主張は、結局のと

ころ、「愚かな人々も適切な教育で理性的になることができ、そうすれば非合理性の問題は解決する」というものにすぎず、彼自身が批判していた「理想主義のそれと同じもの」にすら見えると西村はカーを批判する（153）。

以上のように、カーの解に対して西村は厳しい批判をしている。カーの解を含め、伝記作品執筆から『危機の二〇年』までにおける、カーの思索に対する西村の評価がどのようなものかを次項では見ることにする。

（9）カーの思索に対する西村の評価

西村は「現実主義と理想主義の理論的統合の試みは、危機の診断と有機的に結びつくような主軸を欠いて、二つの思潮の間を単に行き来しているだけとも見紛う折衷的なものに止まっている」と論じる（169）。カーの視点は、その「相対主義的な性格ゆえに決定的な形で当為を打ち出せないでいる」（170）というのが西村の結論である。「既に相対主義を経験した時代において、理想主義的でありすぎた。これこそ、カーの議論が普遍的なものを導きえなかった理由である。このことを理由として、1930年代初頭以来進められてきたカーの一連の思索は、失敗という形でその第一幕を閉じたのであった」と述べて、西村は彼の著作を結んでいる（170）。

以上、西村 2012 による『危機の二〇年』の解釈を検討してきた。本節は西村 2012 の議論を、以下の項目に分けてその内容を分析してきた。つまり、歴史の流れと現実主義・理想主義、そして近代理想主義の起源と限界、現実主義と近代現実主義の定義と両者が同義であるかを検討し、非合理性の問題と普遍主義、さらには虚無主義についての西村 2012 の解釈を考察した。そののち、西村 2012 による『危機の二〇年』の評価を検討した。

ここまで本稿は、西村 2012 の各議論を考察してきた。その上で次節からは、西村 2012 の問題点と、考えられる今後の課題を論じる。

8. 西村 2012 の問題点

（1）伝記作品と『危機の二〇年』の連続性

第一に、西村 2012 の一番大きな問題として、伝記群と『危機の二〇年』との連続性が不明瞭である。その理由は、近代理想主義と近代現実主義という枠組みを立てることによって、彼の著作には、伝記群と『危機の二〇年』との連続性がなくなっているようにみえることに起因している。

西村 2012 では、伝記群の検討と『危機の二〇年』の検討の間に連続性を見出すのが難しいだけでなく、伝記作品の意義が積極的に打ち出されていない。伝記群自体が過小評価されているかのようである。

既述のように『危機の二〇年』では、「マルクスへの言及はいくらも見られるものの、ロシアもロシアの思想家もほとんど触れられてはいない」と西村は述べている(117)。しかし「カーにとってのロシアが同時代の脅威に光を照らす、半ば道具的な枠組みであったことを考えると、この事実に拘泥する必要はない」と西村は主張する。だが、これはむしろ彼の著作における、伝記群と『危機の二〇年』の連続性の弱さを彼自身が、認める形となっている。

確かに、西村 2012 は、伝記群と『危機の二〇年』の間に連続性があることを主張している。しかし、その連続性とは『ドストエフスキー』で発見された、非合理的な人間と社会秩序の構築・維持の問題以外、西村 2012 は著していないように見える。伝記群は、それ以上の積極的な意義を、カーの思想の発展過程において持っていないのかは、今後、さらに研究されるべきである。

(2) 理想主義対現実主義という構図

西村 2012 の最初の部分では、彼は、既存の先行研究に対して、理想主義と現実主義という構図で議論をする不毛さを述べ、その構図を使用することに反対している。しかし、結局、西村 2012 は、現実主義対理想主義という枠組みにとらわれている。近代理想主義の起源や近代現実主義の起源は、カーの述べていることが使用されている部分もある。しかし、近代理想主義や近代現実主義に関する議論には、カーが述べていることをはるかに超える西村自身の知識と、彼の独自の見解が示されている。カーのテキストの分析というボトムアップ式の作業と西村の独自の説の境界がわかりにくい。そのためこの部分においては、各議論に対応するカーのテキストの原文を見つけることが困難である。第三章まで、伝記作品について述べたのち、第四章の『危機の二〇年』のテキストの分析は、あまりに多くの部分が、現実主義と理想主義の議論に割かれている。

以上、西村著作について考えられる二つの問題点を見た。

しかしながら、このような問題点が考えられるとしても、西村 2012 が持つ画期性はカー研究に新しい視座を呈したことは疑いようもない。国際政治学の「外」である伝記作品を分析し、解釈することにより示されたこの著作の研究結果は、今後の新しいカー像探究に大いなる貢献を果たしている。

結語

既存の学説史研究が、国際政治の「内」を掘り下げてきたのに対し、本書は「外」である伝記作品に着目し、各伝記作品と『危機の二〇年』の緻密なテキスト分析を行うことにより、国際政治学の起源に迫った。

西村は既に相対主義的な時代において、カーは理想主義的でありすぎた事実こそが、カーの議論が普遍的なものを導きえなかった理由であると述べた。このことを理由として、1930年代初頭以来進められてきたカーの一連の思索は、失敗という形でその第一幕を閉じたのであったと、西村 2012 は結論付けている。

既述の通り、この非常に重要な西村 2012 の研究結果を踏まえて、今後伝記作品に関する更なる研究が行われることにより、既存のカー像とは違うものが打ち出されていくことであろう。

参考文献

- Carr, E. H. 1931. *Dostoevsky (1821-1881): A New Biography*, London, G. Allen & Unwin.
—1933. *The Romantic Exiles: A Nineteenth-century Portrait Gallery*, London Victor Gollancz.
—1934. *Karl Marx: A Study in Fanaticism*, London, J. M. Dent & Sons.
— 1937. *Michael Bakunin*, London, Macmillan.
—1939. *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London, Macmillan, (2nd ed., 1946, Basingstoke, 2001).
—1936. "Public Opinion as a Safeguard of Peace," *International Affairs*, 15.
Hallett, J. 1930. "England Adrift," *Fortnightly Review*, 128.
西村邦行 2012. 『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』昭和堂。

[A Study of Kuniyuki Nishimura's *The Birth of International Politics: E.H. Carr and the Bottlenecks of Modernity*.]

[KAWAMURA, Shinobu・元九州大学大学院法学府博士後期課程・日本翻訳連盟認定産業翻訳士・翻訳事務所代表・現在の研究テーマ：E・H・カーの国際政治思想]